# 「新型コロナワクチンの小児接種のすすめ」

神奈川小児科医会副会長
髙宮小児科院長
髙宮　光

新型コロナウイルス感染症（以下新型コロナと略します）は 2023 年 5 月 8 日に 5 類感染症に移行するまで全国で 3,300 万人以上が感染し、国民の 4 人に 1 人が罹った計算です。また 73,000 人近くが亡くなっており、致死率は 0.2%で季節性インフルエンザの 10 倍と考えられています。5 類感染症になってからの 1 年間でも 32,000 人以上が亡くなっています。

小児は新型コロナに罹りにくく、重症化しにくいと言われています。それは新型コロナウイルスが体内に侵入する入口となる受容体が小児には少ないためだとか、小児は風邪のコロナウイルスに日頃罹っていることによる交差免疫のためだとか言われています。確かに小児の感染者は少なく、亡くなる児も少ないです。ただゼロではありません。

第 5 波（デルタ株）にあたる 2021 年 9 月に国内で初めて未成年者が亡くなり、第 6 波（オミクロン株）にあたる 2022 年 2 月に初めて 10 歳未満の児が亡くなりました。2022 年の 9 か月間に亡くなった未成年者の 50 人について調べたところ、性差はなく、9 割が 12 歳未満で、1 割 5 分が 1 歳未満でした。6 割が基礎疾患はなく、9 割が新型コロナワクチンを接種していませんでした。死因の 4 割が中枢神経系の異常で、その 7 割が急性脳症で、肺炎は 1 割未満でした。高齢者の死因の多くが肺炎であるのと対照的です。季節性インフルエンザの死因も高齢者は肺炎が多く、小児の死因は脳症が多いのと同様です。

新型コロナの特効薬は第 6 波にあたる 2022 年から使えるようになりましたが、12 歳未満は適用になっていません。新型コロナの第 1～4 波までの致死率はおよそ 1.8%でした。この値は 100 年以上前に全世界で大流行したインフルエンザのスペイン風邪におけるわが国の致死率に相当します。この致死率を 1/9 にあたる 0.2%に引き下げたのは新型コロナウイルス自体の変異と新型コロナワクチンの効果と考えられています。すなわち新型コロから 12 歳未満の小児を守るのはワクチンしかありません。また小児も 3%近くに後遺症が残ります。そしてこのワクチンは新型コロナの後遺症を予防できることもわかっています。

わが国で新型コロナワクチンを 2 回接種しているのは全国民の 8 割で、その接種率は世界第 4 位である。しかし、小児（5～11 歳）では 25%未満で、乳幼児（6 か月～4 歳）に至っては 5%未満の接種率である。またショッキングなことに新型コロナの発症から死亡までの期間は平均 3 日と非常に短いことです。もし今後新たな特効薬が開発されたとしても、平均 3 日間で亡くなる疾患に薬の効果は望めません。そのため全ての小児に新型コロナワクチンの接種を推奨すべきです。